

東方後日譚

ガンアーク弐式

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、毛玉と戦車娘が三人の人間が異変解決に尽力した後の幻想郷を舞台にした後日譚である6／2あらすじを若干変えました

目次

第0章 後日談開始

後日譚の始まり | 1

12 90式妖戦車、名前はまだ無し

第0章 後日談開始

後日譚の始まり

妖怪や神等の存在と少数の人間が住む世界である幻想郷に春の訪れを告げる春告げ精の声が響く三月の初めのある日の深夜、幻想郷で人間がもつとも多く住んでいる人里と外を区切る門の前に一台のトラックが止まっていた。トラックは宅配業者が使うような大型の物で、荷台にはカラスのマークが描かれている。

いずれにしろ、その機械がほとんど存在しない幻想郷では異物であるトラックの運転席に、ツナギを来た男が不機嫌そうに雑誌を読んでいた。

「約束の時間をとうに過ぎているぞ。まだ、寝ているんじゃないのか？」

男は吐き捨てるように言うとうと右手に付けた腕時計を見ると時計の針は午前六時を指していた。それを見て、トラックを降りるとトラックの周囲を歩き、人がいないかを確認し始めた。

幸いにも周りに誰もいないことを確認すると男は再びトラックに乗り込んだ。

「人里の住人や妖怪達がトラックを見つけられるといろいろと面倒だから、早く来て欲しいんだがな。特に、今回は時間厳守と言っておいたはずなんだがな」

「ごめんなさい、ちよつと遅くなつたわ」

「!?」

突然、誰もいないはずの助手席から女性の声が聞こえ、驚いた男はとつさに助手席の方を振り向いた。ついさつきまで、誰も座っていないかつた助手席に紫色のワンピースをきた妙齡の女性が座っているのが男の目に映つた。彼は、彼女が自分の取引相手だと分かるど溜めていた苛立ちを放出するように怒気を込めて言い放つ。

「八雲、今回は時間厳守だと言つておいたはずだぞ!!」

「だって、冬眠から覚めたばかり時に言わないですよ。それにこんな遅くに取引だなんて、私にとって拷問よ」

「今回の品物は裏の見張りにバレたら、ヤバイ代物なんだぞ。奴らにばれずにここまで輸送するのに、どれだけ苦労したか……分かつているのか!?!」

八雲と呼んだ女性の態度に、男は我慢できずに、声を張り上げた。

外で仕入れてきた様々な物を幻想郷に運んでた。そのほとんどが幻想郷では自給できない海産物や塩、稀に外の世界の道具や酒等を運んでくる際、彼女は彼の取引をする際の常連なので、取引時間に遅れる事が多いのは知っていた。

だが、彼が運んできた物は、本来彼が取り扱つていい物ではなく、露呈すると非常にまずい事になるから、彼は怒つたのだ。

「分かっているわよ。荷物を確認するわよ」

八雲は怒っている彼の言葉を聞き流しつつ、白魚のようなきれいな指を突き出した。彼女の前に両端がりボンが結ばれた不気味な裂け目が現れ、彼女は。紫一色の空間に無数の目玉が蠢くそれは見た者すべてを発狂させようとしているかのようだった。それを間近で見た男は、すぐに顔をそむけた。いくら裏の世界との取引も取り扱っているとはいえ、男は特殊な力をもっていないくただの人間であり、彼女が作る裂け目を直視できなかった。だが、普通の人間なら退こうとする不気味な裂け目の中に彼女は入っていた。

勘弁してくれよと男がぼやくとすぐに裂け目から八雲の顔を出した。

「注文通りの品よ、ご苦労様。お代は明日、藍に振り込ませるわ」

「了解、荷物はここで降ろしてもかまわないか？」

「ええ、お願いするわ。受け入れ用のスキマは開けておいたから」

男の問いかけに、八雲は了承する裂け目の中に顔を引込めるとそれと同時に男は運転席から降り、トラックの後ろへ移動すると先ほど見た物と同じ裂け目はトラックのすぐ側に出ていた。

男はそれを見るとトラックの後ろにある荷台のドアを開いた。荷台の中には、大人ぐらしいの大きさのコンテナが三個ほど入っており、男が荷台の扉が開くと同時に、中のコ

ンテナが一人で浮き上がり、次々と裂け目に入っていく。他人からすると運んでいる透明人間がコンテナが運んでいるように見える。

すべてのコンテナが裂け目の中に入ったのを確認すると男は荷台のドアを閉め、トラックに乗り込むとすぐにエンジンをかけ、アクセルを踏んだ。

トラックのライトが勝手につき、軽快なエンジン音を残して、闇の中へと消えていった。

幻想郷の最東端に位置する丘にある一つの神社がある。外の世界と幻想郷を隔てる結界、博麗結界の管理者である博麗の巫女が住む博麗神社である。博麗の巫女は結界の保持と管理をしながら、妖怪退治や異変解決をしているために、人間から信頼も厚い。通常なら参拝客が多くてもおかしくないのだが、神社が妖怪の溜まり場と化しているために人間の参拝者は少ない。人里、性格には人里の住人が妖怪を異常な程に恐れているのが理由なのだが、彼女はそれを理解していない。そんな博麗神社の縁側で白いフサフサの毛が生え、顔がついた球体がフワフワと浮いていた。

その隣に脇が丸出しの巫女服を着た少女、博麗の巫女こと博麗霊夢がお茶を飲みなが

ら、つまらなさそうに見ていた。

珍妙な毛玉は満足げに小さく呟く。

「今年度は異変もなく、平和に終わったな」

「そうね、これで参拝客が来ればもつといいのに」

巫女は投げやりに言う。湯飲みに入ったお茶をすすする。

「それは、あんたの努力が足りないせいだろう」

「妖怪ばかりがよってくるのよ。しかも、妖怪はお賽銭をくれないし、人間を呼び込もう

としても失敗ばかりだし……あら？」

「ほいほい、分かったから……お!？」

霊夢の愚痴を毛玉は、聞き流すと縁側から見える森の方からながこつちに向かつて飛んできたことに気が付いた。

毛玉がよく見ているとそれは、箒にレトロな魔女装束に身を包んだ少女だった。手には大きな袋を持っており、毛玉がよく知っている人物だった。

箒に乗った少女は、二人がいる縁側の前まで近づくと箒から降り、縁側の二人（性格には一人と一つ）に元気よく声をかけた。

「霊夢、遊びに来たぜ。お、ウィルもいっしょよか、ちょうどいいぜ」

「あら、魔理沙じゃない。今日はどうしたの？」

「なんか、面白い物でもみつけたのか？」

霊夢とウイルと呼ばれた毛玉の質問に、魔理沙とよばれた少女は興奮ぎみに言った。

「ああ、昨日の夜、森でこれを拾ってな。ウイルにみてもらいたいだよ」

魔理沙はそういうと持っていた袋の中から一丁の拳銃を取り出すと二人にそれを見せた。

魔理沙が取り出した拳銃は、一言で表すなら土にまみれた鈍色の大きな拳銃であった。

長く重厚な銃身と大きな銃口が威力の強さをアピールしているかのように見え、引き金の上部にある筒型の弾倉もその銃口を合わせた弾丸を入れるために大きく、そして太かった。

もはや、拳銃というよりも拳銃サイズの大型の大砲のような大きな銃だった

霊夢とウイルはそれを見て、驚きを隠せなかった。特にウイルは死んだ家族と対面したかのように、それを凝視した。

「これ……もしかして、あいつの銃？」

「霊夢もそう思うか？ 私もオーランドの物じゃないかと思つてさ。オーランドの事を一番知っているウイルにみてもらったんだが、どう思う？」

魔理沙の問いかけにウイルは、ハッと正気に戻るところ答えた

「確かに、相棒の銃にそっくりだが、ちよつと貸してくれ」

「いいぜ」

魔理沙は言うとおりに、拳銃をウイルに渡すとウイルは、身体の右側面から半透明の腕を出して、拳銃を受け取ると部撃鉄の前についているレバーを後ろ引き、弾倉を横に引き出す。弾倉には、弾丸を装填するために五つの穴が開いており、弾丸は入っていないか

かった。それを見て、ウイルはため息をついた。

「これは相棒の銃じゃない。相棒の銃は弾倉に赤と金のラインが入っているがこれは何の飾りもついていない。それにグリップに焼き印が入っていない。よく似ているが、あいつの銃じゃない」

「そうか……それは残念だな」

ウイルは残念そうにいうと持っていた拳銃を魔理沙に返した。

「そう都合良く、あいつが戻ってくる訳がないじゃないの……あら、スキマ？」

その時、三人の後ろで両端をリボンで結んだ裂け目が開いた事に霊夢は気づき、声を上げた。そして、そこから緑色の箱が出てきて、三人の前に着地する。

「なにかしらこれ？」

「スキマから出てきたということ、紫が送ってきたのか？」

「紫の奴、なんのつもり……!?!」

スキマと呼んだ裂け目から現れた箱の前に興味を閉める二人と一つ。

その時、スキマから紫色の導師服に身を包んだ女性が上半身を出し、霊夢に声をかけた。

「それは、あなたへのプレゼントよ。今までの異変解決へのお礼よ」

「紫、あなたがそういうと余計に怪しいわ。何を企んでいるの?」

目の前の箱に疑問を抱く霊夢を見ながら、紫と呼ばれた美女は「別に何も企んでいないわよ。ただのご褒美よ」というとそのまま、スキマの中へ消えた。それと同時にスキマも閉じて消えた。

「けっ何がご褒美よ。俺にとつちや異変は災難の何者でもないのに、いい迷惑だぜ。だいたい……」

それを見て、毛玉は不機嫌そうに吐き捨てた。毛玉にとって、異変とは災厄の代名詞であり、ろく目にあつた記憶がなかった。

例に上げると「倒れてきた本棚の下敷きになる」、「半人前の剣士に斬られそうになった」、「怪力を誇る幼女に投げ飛ばされる」、「背中に矢が突き刺さる」等、とにかく災難の連続としか言いようのないほどであった。

ふてくされる毛玉のことなんか、お構いなしに置かれた箱を興味津々に見ている魔理沙が霊夢の方を振り向いて言う。

「霊夢、これ開けてみようぜ」

「そうね、別に開けても問題ないと思うから……ええ?」

「霊夢がそういうなら、問題ないと思うぜ」

霊夢がそういうと魔理沙が箱に手を触れると箱が一人で開き、箱の中に入っていたモノが二人と一つの前に姿を現した。

「箱が勝手に……ええ!」

「これはいったいどういうことだ?」

「な……なんだと!」

それを見た瞬間、魔理沙と霊夢は驚きを隠せず、啞然と箱の中身を見ていた。

ウィルに至っては、ギャグ漫画の演出のように鼻血を吹き出しながら、地面に倒れてしまった。

紫が届けた箱に入っていたモノ、それはリボンを身体に巻いた以外は糸も纏わず長い銅色の髪をした少女だった。少女は、啞然とする二人を金線でつくったような金色の瞳でじつとみている。

「ウィル、大丈夫か!」

「女性の裸体が……ああ、行けるはずがない天国と地獄が交互に見える」

「しつかりしろ!!」

あつげに取られた二人だったが、正気に戻ると魔理沙は鼻血を流しながら、地面に倒れているウイルに駆け寄り、声をかけるが、ウイルは片言のようにしかしゃべらなかつた。

そんな一人と一つのやりとりを無視して、霊夢は少女に近寄り、声をかけた。

「あなた、名前はなんていうの?」

霊夢の質問に、少女は鈴のような透き通った声で答えた。

「90式妖戦車00型です。愛称はありません」

「90式妖戦車00型?? よく分からないけど、それが名前ね?」

少女の聞き覚えのない単語に混乱しつつも、それが彼女の名前がいうことは理解できた。

「はい、これからよろしくお願ひします。戦車長殿!!」

「戦車長……殿?」

自分をへんな呼び方で呼ぶ少女に、霊夢は戸惑いを隠せなかつた。

これは異変嫌いの毛玉、ウイルと妖戦車と名乗る少女を主軸とした正史とは微妙に違

う東方Projectの後日譚である。

90式妖戦車、名前はまだ無し

博麗神社にある住居スペースの一角にある茶の間で霊夢と魔理沙は、ちゃぶ台の反対側に座る例の少女を興味深く、かつ怪しそうに見ていた。

紫からご褒美として受け取った戦車と名乗った少女、彼女が何者かそれが二人にとつて、気がかりであった。

当の少女は、白い長襦袢——霊夢が自分の箆筒から出した物を身につけ、困惑している二人を不思議そうに見ていた。

「なあ、霊夢。コイツは自分の事を〈戦車〉と名乗ったんだよね？」

「ええ」

「でも、ロケットをぶっ壊したアレと似ても似つかないんだが」

魔理沙は少女に聞こえないように霊夢にこっそりと問いかけ、霊夢も小さくうなずく。

しかし、目の前の彼女が戦車とは魔理沙には信じがたかった。どうみても見た目は霊夢よりも年下の普通の少女にしか見えないからいからだ。

「もしかしたら、九十九神の一種なのかもしれないけど……それにしても、妖力が普通の

妖怪と感じが違うのよね」

「霊夢は少女を彼女が放っている妖力が普通の妖怪とはどこか違うのを感じとつていた。」

「このまま考えても仕方がない」と魔理沙は、思い切つて少女に質問した。

「なあ、お前は本当に戦車なのか？」

「はい、そうです。正確には自衛隊採用第三世代主力妖戦車“90式戦車00型”です」
「妖戦車って、なんだ？ 九十九神の一種か？」

魔理沙は、彼女の言葉に首を傾げた。

魔理沙は「妖戦車」の事を九十九神——長い年月を経て、妖怪化した器物の一種だと理解した。唐傘おぼけや妖刀のような物だと、とりあえずは理解することはできた。

魔理沙の質問に彼女は笑いながら、答えた。

「九十九神ですか……A1系列やレオパルドII系列ならともかく、90式の私は違います」

「そうなのか？」

「はい、ベースとなる戦車に術式を組み込んだ部品や霊的媒体に変異、置換もしくは追加して、自我と変性能力を持たせた自律型戦車、それが妖戦車と呼ばれる兵器です」

二人のやりとりでなにかを察したのか、霊夢が口をはさんだ。

「ようするに、あんたは私の式神ということね」

「はい、簡単にいえばそうなりますね」

「戦車を式神にするなんて、紫は何を考えているのよ」

霊夢は紫がやったことにぼやいた。

それを見て、疑問に感じた少女は首をかしげた

「違いますよ、私は元々自衛隊の所属でした。紫さんから聞いていませんか？」

「自衛隊、なんだそりゃ？」

予想外の事々に魔理沙が尋ねると少女は、当たり前のように答えた。

「そのままの意味ですよ。自衛隊は日本が有する軍隊のことで、私は第二北方防衛戦車中隊に所属する戦車の一台でした」

「いまいちよくわからないけど、元々は自衛隊なんちゃらという連中の式神だったということは分かった」

霊夢達は少女の言葉の意味が微妙に分からなかったが、彼女が自衛隊に所属していた式神だと理解した。

だが、そこで霊夢の脳裏に「彼女がなぜ、私の式になっているのだろうか？」という疑問が浮かんだ。

「で、その自衛隊の式神だったあなたが、どういう縁で私の式神になったの？」

「確かに、自衛隊とやらの式だったんだよな？」

霊夢が質問するとそれに続くように魔理沙が彼女に尋ねた。

「あつそれは——」

霊夢の質問に彼女は答えようとした瞬間、上から霊夢達にとって、聞き覚えがある声が言葉を遮った。

「それについては私が説明するわよ」

霊夢が上の方を見ると不気味な裂け目——通称、スキマから上半身を出した紫が怪しげな笑みを浮かべていた。

霊夢が怪しむように「紫、どういう事なの？」と問いかけると紫はゆっくりと話始めた。

「結論から言うところの子の主人はもういないのよ」

「主人がいないって、どういう事だ？」

「機種転換という名目で捨てられたのよ。もつといい戦車を、高性能の戦車をそろえるために」

紫の言葉に、魔理沙と霊夢は言葉が出なかった。

式神を捨てるという行為は、普通は考えられなかった。

「もつと優秀な式を手に入れるために、いままで仕えてきた式達を捨てるなんて薄情だ

な」「それは違うわよ。彼らが薄情なんかじゃない、式も兵器や備品扱いなのよ」
「紫さん、捨てたという言い方は止めてくれませんか」

紫がそう言った瞬間、少女が声を荒げ、会話に割り込んだ。

彼女に叫びに場にいた全員が少女を見た。少女は目をつり上げ、顔を真っ赤して言い放った。

「工場から造られ、機種転換により除隊されるまで約二十年間、自衛隊の一員として任務を推考してきました。敵味方の砲弾が飛ぶかう戦場の中を仲間の妖戦車や戦車兵と共に駆け抜けたこともありました」

怒気のこもった彼女の言葉に霊夢と魔理沙は何も言えず、紫は黙って彼女を見ていた。

彼女はお構いなしに言葉を続けた。

「前の戦車長、暁少尉は私を部下として扱ってくれました。機種変更の時も戦車長と私の乗務員は私が後方へ輸送される最後まで見送りに来てくれました。だから、捨てたといういいからはやめてください」

彼女が言い終えると魔理沙は「すまない」と彼女に謝り、さらにこう続ける。

「薄弱なんて言い方は悪かったな。お前がそこまでいうんだから、前の主人はイイヤツ

だったんだな」

「はい、私が除隊する直前まで共に戦った戦友でした」

「前の戦車長とやらの話を聞かせてくれよ、ちなみに私は霧雨魔理沙だ」

「いいですよ。前の戦車長——暁少尉と出会ったのは、今から」

魔理沙のお願いに快く受けた少女は自身の経験を語り始め、魔理沙はそれを興味深そうに聞いていた。

魔理沙と少女との会話を横目に、霊夢は納得したように頷いた。

「機種転換とやらでお役ご免となった子を紫が拾ったという訳ね」

「ええ、式としても優秀な戦車だったから、霊夢に上げようと思ってね。いろいろな事をして、手に入れたのよ」

(なにをしたのよ)

笑顔でとんでもないことを言う紫に霊夢は何も言う気がしなかった。どんなに苦言を言った所でこのスキマ妖怪は簡単に受け流されるのは目に見えていた。

その時、紫が何かに気付き、首を傾げた。

「あら？ ウイルはどこにいったの？」

「隣の部屋で鞠のように転がっているわ」

霊夢はどうでもいいといわんばかりに言うと紫は「あらあら、やっぱり裸リボンさま

「ずかったわね」と微笑を浮かべる。わざとねらっていたくせにとつぶやいた。

「藍に彼女の持ち物一式を届けさせるから、後はよろしくね」

そう言い残し、隙間の中へと戻ろうとする紫を霊夢は制止させようとするも彼女はスキマの中へと消え、続くようにスキマも閉じてしまった。

霊夢は、肩を落とし溜め息をつく。

「ただでさえ家計は火の車というのに、さらに彼女とは本当にどうしよう」

隣で魔理沙と楽しそうに会話をする少女に目を向けた瞬間、彼女自身の名前を聞いていない事に気が付いた。

90式妖戦車00型が彼女の名前かだと思っていたが、さっき聞いた話だとも個人の名前というよりも河童や天狗などの種族名に近い様な物だと理解した。だからこそ、霊夢は個人の名前を聞いておかなければと考えた。

魔理沙と会話に盛り上がっている彼女に割り込むように彼女に質問した。

「そういえば名前をきいていなかったわね」

「名前は90式戦車00型です。でも、それはさっきいきましたよ?」

同じ事を質問する霊夢に90式と改めて名乗った少女は何故と言わんばかりに首を傾げた。それを見た魔理沙が、霊夢の言いたいのかを察し、助け船を出した。

「そうじゃなくて、おまえ個人の名前を聞いているだよ。その90式って、天狗や河童み

「たいに種族名だろう」

「そういうことでしたか」

90式は魔理沙の言葉で質問の意図を理解しすぐに答える。

「戦車である私に個人の名前はありません。以前の軍にいた頃は識別番号“DFN2T10”が個人名代わりでしたが」

「でしたが？」

魔理沙が疑問に感じ、反射的に言葉を返すと彼女は

「軍から除隊したので、今はありません」

「はい？」

自身の名前は不要だといわんばかりの彼女の無機質な答えに二人は唾然とした。彼女もその二人の様子に首を傾げる。

「どうしたんですか？」

「いや、名前が番号なのはどうかと思うんだが、名前がないのはおかしいと思うが」

「少尉も他の戦車と区別するためにT10とナンバーを省略して呼んでいましたし、ここでは私以外の妖戦車は存在しないので90式で十分です」

「それでいいのか」

異常者ともいえる発言を平然と言う90式に魔理沙は引き、霊夢は少し考え込んでい

た。それを見て、疑問に感じた90式は霊夢に尋ねる。

「どうしたんですか、戦車長殿？」

「いや、あんたの名前を考えていたのよ」

霊夢の返事にさつきとは逆に90式は呆気にとらわれた。それを見た霊夢は彼女にこういった。

「どうしたのよ、式に名前がないから私が付けてあげると言ったのよ」

「でも、名前と言っても個体を識別するために必要なだけで——」

霊夢の行為に理解できない90式は驚くが、霊夢は彼女の言葉を遮りこう言い切った。

「とにかく、その90式という味気ないわ。だから、あなたに名前を付けてあげるわ」
(そういうえば、暁少尉も戦友を番号で呼ぶのは味気ないと言っていたわね)

霊夢の言葉に90式は前任の暁少尉も自分の戦車長になった時の事を思い出した。その時は、識別番号の後ろ三文字からT10というコードネームを付けてくれた。

90式が思いにふけていたが、「おい、どうしたんだ？」という魔理沙の呼びかけで彼女は現実に戻された。

「すいません、ちよつと考え事を」

「そう……霊夢？」

90式は魔理沙に小さく謝った瞬間、さっきまで首をひねって考えていた霊夢は突然、思いついたかのように言った。

「あなたの名前、鈴の香りと書いてりんか鈴香ってどうかしら？」

「鈴香、案外ありきたりだけどいいんじゃないか」

霊夢の案に賞賛の意を示す魔理沙に対して、90式は沈黙したまま霊夢を見ていた。

その様子に、彼女が自分の考えた名が気にいらなかったのかと思った。

だが、霊夢の予想と正反対に彼女は敬礼をしながら口を開いた。

「これから私の名は鈴香ですね。戦車長殿、これからよろしくお願いします」

「戦車長という変な呼び方は止めてくれないかしら？ 私の名前は博麗霊夢だから、普

通に霊夢と呼んでくれない？」

「了解しました、霊夢殿」

変に礼儀正しい90式、いや鈴香に霊夢は何も言わなかった。「戦車長殿」という変な肩書きで呼ばれるよりもずっとマシだと思ったからだ。

その様子を魔理沙は面白そうにみていた

「確かに、霊夢が戦車長とかの肩書きで呼ばれるのはおかしいぜ」

「魔理沙！」

顔を赤らめて言う霊夢が余計におかしいと思つた魔理沙は笑いをこらえながら、
「悪い、悪い」と言うところ続けた。

「ちなみに、私は普通の魔法使い、霧雨魔理沙というんだ。よろしくな」

「こちらこそよろしくお願ひします。魔理沙さん」

「なんで、私の場合はさんづけなんだ？」

自分だけさんづけに疑問を感じた魔理沙は、鈴香に尋ねると「私の上官だからです」と彼女が率直に答えた。

それを聞いた霊夢は「式神は、生真面目なのが多いのかしら？」とつぶやくと魔理沙が何かを思いつき、手を叩いて口を開いた。

「鈴香は、どんな能力を持っているんだ？」

「能力ですか？ これつと云つて特別な能力はもっていませんが」

魔理沙の質問に鈴香はどう答えたらいいいのか分からず、戸惑つた。それを見て、霊夢が助け船を出した。

「難しく考えなくてもいいのよ。自分が一番自慢できることが私達が言う所の能力なのよ」

「そういうことでしたか」

鈴香は霊夢の言葉で納得し、すぐに答えた。

「私の能力は移動しながらでも正確に砲撃できることです」

「つまり、正確に砲撃する程度の能力ということね」

「スペルカードルールに役に立ちそうな能力ね」

スペルカードルールとはなんですか？」

霊夢が言った。スペルカード」という言葉に鈴香は興味を示した。鈴香は幻想郷についての知識がほとんど持っておらず、故に幻想郷についての知識を得たいと思つていた。

彼女は質問すると霊夢は彼女の質問に答えた。

「スペルカードルールというのは、幻想郷での決闘法の一つよ。どういふもかというからね……」

「口で言うよりもまずは実践だぜ。外でやりながら、教えてやるよ」

「ちよつと、魔理沙さん!」

霊夢の言葉を遮つた魔理沙は、鈴香の腕を掴むと彼女を外へと連れ出した。

それを見た霊夢は「あいかわらず、論より行動ね」と呟くと立ち上がり、隣の部屋と仕切っているふすまに近づいた。

そして、ふすまを開けると顔を青白くして、畳の上に転がっているウイルが霊夢の目に写つた。ウイルの鼻には止血用のティッシュが詰められていた。

「ウイル、調子はどう？」

「だるいが、まあ動けなくもないかな？」

ウイルは小さく答えると霊夢が無関心にそうと呟いた。

そして、ウイルは身体をゴロリと動かし、鈴香を手を引つ張る魔理沙に見ながら口を開いた。

「話はふすまごしに全部聞いていたよ。霊夢が式神を持つとはな」

「どういふつもりかしらないけどねえ」

霊夢は小さく言うと言と笑顔で鈴香の手を引つ張る魔理沙とそれに困惑する鈴香に視線を向け、何かが起こるの予感を感じていた。

「面倒なことが起こりそうね」